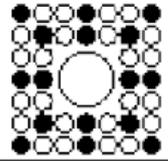


Newsletter of the British Council Japan Association

# BCJA Newsletter

No. 21

December 31, 2004



## BCJA奨学金へのご寄付のお願い

2004年(平成16年)9月28日

BCJA会長 橋都浩平

BCJA 英国留学奨学金  
応募者の皆様

BCJA会長 橋都 浩平

BCJA 英国留学奨学金審査委員会委員長 白鳥 令

昨年中とは違ってかわって寒い日が続いていますが、BCJA会員のみなさまにはお変わりなくご活躍のことと思います。

さてBCJA奨学金も3年間の過ぎ、もう4年目の奨学生が英国で勉強を始めています。今回のニューズレターにもBCJA奨学生の留学体験記が寄せられていますが、さまざまな分野の優秀な人たちが、実りある体験を英国でされていることが、よくお分かりになることと思います。

このBCJA奨学金はわれわれ会員からの善意の寄付によって運営されています。BCJA会員のみなさまは英国留学のチャンスを得たことによって、多くのことを学んだだけではなく、人生そのものがより豊かになるきっかけとなったのではないかと思います。われわれの力で、より多くの若い学徒に同じよるこびを味わわせてあげようではありませんか。

みなさまのご寄付が容易になるように、新しく郵便振り込み口座を開設しました。振り込み用紙を同封致しますので、1口5000円、出来れば2口以上のご寄付をお願いしたいと思います。

以上、お願い申し上げますとともに、会の発展に一層のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

\*\*\*\*\*

## BCJA 英国留学奨学金 2004年度報告

BCJA 英国留学奨学金審査委員会委員長  
白鳥 令

BCJA 英国留学奨学金制度を創設してから、4年が経過しました。今年度も、10名の方々に英国で研究あるいは勉学のために自由に使っていただくために奨学金を差し上げることが出来ました。各方面のご協力ご厚意に感謝致します。

以下は、本年度応募者全員にお送りしましたお礼と報告の手紙です。

\*\*\*\*\*

初秋の候、貴下ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。この度は、私共かつて British Council の関係で英国に留学をした者達が創設致しましたBCJA 英国留学奨学金にご応募いただき、厚くお礼申し上げます。

お一人当り英国留学のための旅費相当奨学金(15万円)というわずかな金額の奨学金であるにもかかわらず、本年度は63名の応募者があり、しかもそれぞれが高度な学力と知識、意欲的な計画の持ち主でありまして、審査委員会は非常に困難な選択を迫られました。

公正な審査の結果、別紙の通り、2004年度は10名の方々にBCJA奨学金を差し上げることになりましたので、お知らせ申し上げます。

なお、選考に当りましては、英国留学で学ぼうとされている具体的な目標や計画が明確か、また、英語力も含め、英国での研究や勉学の準備は出来ているか、の2点を重視して審査致しましたことを付記致します。

何分にも英国留学の経験を持つ個人の善意の寄付に財源を依存しているBCJA奨学金であり、十分な援助をすることが出来ませんが、今後も毎年この奨学金の募集を続けることを考えておりますので、どうかよろしくご支援の程お願い申し上げます。

なお、ご参考までにBCJA 英国留学奨学金の規程を同封致しますので、ご覧下さい。



## 2004年度奨学金授与者リスト

姓	名	留学先研究機関	研究分野	所属 / 出身校
角元	直人	London, Courtauld Institute of Art	美術保存	上智大学
蛭田	圭	Essex	政治学	慶應大学
川添	菜津子	Oxford	環境保存	筑波大学
山川	佳香	London, Royal Veterinary College	獣医学	麻布大学
大崎	晴美	Edinburgh	神学	熊本大学+一橋大学
明和	美桂	Sussex	開発援助	立命館大学
久保	正樹	Queens Univ, Belfast	音楽芸術	慶應大学
中江	郁子	London, LSE	法律学	東京大学
田中	麻希	Oxford	社会法	東京外国語大学+ American U
川崎	隆士	London School of Hygiene	公衆衛生	大阪医科大学

### 2003年度BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告[1]

#### 「英国留学レポート」

戸塚 奈津子

私は、2002年9月よりUniversity of East Angliaの開発学部で途上国を取り巻く国際政治、マクロ経済、国際機関や先進国の援助方針の動向を学び、引き続き2003年9月から1年間、イングランド中部にあるLoughborough大学の土木・建設工学部付属Water, Engineering and Development Centre (WEDC)の修士課程で発展途上国における都市部の水環境の管理(水にかかわる伝染病、上水、下水、都市排水、水質汚染など)について勉強しました。渡英前には、約8年間土木のコンサルタントとして、途上国における水資源開発・管理や洪水防御の業務に携わっていましたが、年が経つにつれてよい意味でも悪い意味でも途上国での仕事に慣れてきて、途上国問題や開発援助に対する自分の視点や考え方が固定化しつつあるように感じていました。途上国を取り巻く問題を少し違った立場で客観的、学術的に考えてみようと思い、遅まきながら思い切って英国に行くことにしました。

留学中は、予想以上にいろいろなことを大学で学べたことは言うに及ばず、様々な国出身の人々と知り合い、かけがえの無い友人をたくさん得ることもできました。そして、英国という国に住んだこと自体が、今後途上国での仕事を続けていく上で貴重な体験となりました。私自身はこれまで、先進

国というのは、安全、利便、快適で効率的な場所だと思っていました。ところが、英国は先進国と言われながらも大量消費経済を良しとせず不便さと非効率性を享受しており、イングランドの地方都市に住んでいた私は、東南アジアの途上国の地方都市の方が利便性、信頼性、効率性がずっと高いのではないか、と思う場面にもしばしば出会いました。寮にあったなかなかゴミを吸わない旧式の掃除機、夕方にはほとんどの店が閉まってしまうCity Centre、週末に突然「本日は人手が足りないので閉鎖します」と言う理由で駅を通過してしまったロンドンの地下鉄、毎回突然のキャンセルや遅れに悩まされた電車、英国の事務所に到達してから私の手に届くまでに毎回2、3週間もかかるDHL、などなど、東南アジアの片田舎での経験を思い起こさせる場面に遭遇するたびに「こういう先進国もあるのか」と、奇妙な感慨を感じた2年間でした。しかし、イギリスは間違いなく先進国の一員であり、開発の行方というのは必ずしもひとつではなかったということ、自分が今までいかに一つの価値観に縛られていたかということを感じ知らされました。

そして、そういった感情を全部ひっくり返して、私はイギリスという国がとても好きです。特に、仕事柄治安の悪い国で生活することが多かった私にとって、礼儀正しく謙虚で気配りを忘れない人々に囲まれて暮らす安心感は何物にも代え難い英国のすばらしさでした。これまでも出張先から日本に帰国するたびに緊張が解けるのを感じていたのですが、同じような安心感を与えてくれる国が他にもあったということに大きな喜びを感じました。

英国を離れて早2ヵ月半。留学前と同じ職場に復帰したため、現在は留学前と全く変わらぬ毎日が慌しく過ぎており、英国にいたことが遠い昔の出来事に感じられるどころか、自分が英国で勉強していたこと自体が夢だったような気持ちになっています。

これからもいろいろな場所でいろいろな経験をするようになると思います。しかし、学生という立場で過ごした英国での留学生活というのは、本当に特別で貴重な経験になったと思っています。途中であきらめずに2年間勉強を続けて本当に良かったと思っています。

最後になりましたが、私は年齢等の制限から応募できる奨学金が極めて限られていたため、2年間の英国生活は決して楽なことばかりではありませんでした。そのような中で2003年度にBCJAの奨学金をいただきましたことは、いろいろな意味で大変大きな励みとなりました。本当にありがとうございます。心より御礼申し上げます。皆様のご善意に支えられた奨学金をいただいたことに恥じないよう、今後益々精進する所存でございます。

末筆ながら BCJA の一層のご発展と皆様の益々のご活躍をお祈り申し上げます。

(2003年度BCJA 奨学生、Loughborough University, 水環境工学)

\*\*\*\*\*

## 2003年度BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告[2]

### 「BCJA 奨学生報告：ウェールズより」

細田 高道

まず最初にお礼を申し上げます。BCJA 奨学生という名誉ある奨学生として選抜していただき、大変ありがとうございました。詳細は後述いたしますが、BCJA 奨学生となったことで大きな飛躍を英国にて実現することができました。本来であれば皆様お集まりの時に参上してお礼を申し上げるべきと思いますが、いまだ全日程を終了しておりませんので、英国より文面にて失礼いたします。

私はウェールズにありませうカーディフ大学カーディフ・ビジネススクールのPhD(博士)課程に2003年9月より所属しております。簡単にPhD課程についてご説明いたします。PhD課程は3年間のプログラムで、1年目は授業を履修しディプロマという学位を取得することから始まります。無事ディプロマを取得した後、研究プロポーザルの審査を経て承認された学生のみ2年目に進むことができます。2年目以降は基本的には自分の研究に専念できます。ただ、実際にはプロジェクトへの参画、あるいは大学院生や学部生へのチュートリアル実施などが1年目からあり、なかなか専念というわけにはいかないのが実態です。また、3年間のプログラムと申しましたが、PhD取得まで4年かかるのが大多数のようです。

さて、私はカーディフ・ビジネススクールの中にあるLogistics Systems Dynamics Group および Innovative Manufacturing Research Centre に所属し、サプライチェーン・マネジメントの研究をしております。ここでのPhD学生に対する待遇は非常に恵まれたもので、専用のオフィス・スペースに、専用のパソコンとプリンター、本棚、キャビネット等が与えられます。これは私の母校でもあるマサチューセッツ工科大学におけるそれを大きく上回るものです。また、スーパーバイザーである教授との関係もフレンドリーでかつインテンシブで生産的であり非常に満足しております。外部研究機関との交流もグローバルに展開され、交流は研究機関のみならず、政府や民間企業との共同・委託研究も盛んです。常に海外からの客員研究員が在籍しているのも特徴です。ぜひ少しでも多くの人に、英国でのすばらしい研究環境について知って欲しいと思うこの頃です。

かような環境の下、私は無事2年目に進級することができましたが、ここに到達するまでの成果概要を簡単にご紹介させていただきます。まずなんといっても、カーディフ・ビジネススクールからの奨学金決定をお知らせしたいと思います。これは学費から生活費までをカバーするものでEconomic and Social Research Council (ESRC)奨学金と同等の内容です。書類審査におきましてはBCJA からいただきましたレターが大いに有効であったと信じております。その他にも、The Chartered Institute of Logistics and Transport in the UKより国際学会とワークショップ参加にかかる費用の sponsorship もいただくことができました。英国における日本人留学生にとってBCJA 奨学生というお墨付きがあるか無いかで得るものが大きく異なってくるのではと感じている次第で

す。本業である研究については、この1年間で5本もの論文を発表することができました。その内の1つはポスターセッション形式でのコンペティションにて最優秀賞をいただくことができました。さらに、その内容を発展させた別の論文は、今年の6月に、ある国際ジャーナルに提出いたしました。今月(11月)に採用が決定し現在最終の改訂作業に追われている最中です。この1年がこのように生産的であったのも、恵まれた研究環境によるものと思っております。

また、研究と並行し、Integrating Transport and e-Commerce in Logistics Supply Chains (ITeLS) プロジェクトにも参加いたしました。このプロジェクトは約半年間、インタビューやアンケートなどにより対象企業の実態を調査・把握し、クイック・ヒットとなる方策を具体的に提案するというものです。インタビューにおいてはヨークシャー訛(失礼!)に苦労したり、様々な局面で日本と英国のビジネスの違いを感じたりと、大学に居ただけでは体験できなかった事が満載で、この経験は将来に向けての大きな糧となったと思います。毎回ブラッドフォードまで片道4時間近くかけて行ったことが懐かしく思われます。さらにこの10月からは週に5時間~8時間のチュートリアルを主に大学院生向けに実施しています。当初は時間的負担が大きいのではと心配していましたが、まじめで熱心な学生が多く非常に教えがいがあり、今では楽しみになっております。将来はどこかの大学にて教鞭をとりたいと希望しておりますので、その意味でもいい経験と思っています。また、私は初年度より社会工学系の学生代表と、ビジネス・スクールの学生代表の両方を務めております。年に数回、外部監査員との意見交換やパネルミーティングでの意見陳述が求められますが、この1年、事あるごとにディプロマ課程における授業選択の多様性を訴えてきました。そしてこの10月から、めでたく選択肢が4つ増加することになり、とりあえずの成果を挙げることでとてもうれしく思うと同時に、大学の対応のすばやさやに敬服した次第です。より多くの選択肢を得た新入生からは大いに感謝されました。

最後に、カーディフでの生活について述べたく思います。カーディフはウェールズの首都であり、ロンドンからは西へ鉄道で2時間の距離にあります。都会的な部分もあり、またすこし郊外に行けば海あり山ありで、非常に魅力的なエリアです。英国には妻と2人の子供と一緒に来ておりますが、おかげさまで全員元気で楽しく暮らしております。子供の言葉の問題が当初は気がかりでしたが、今では子供に助けられる場面もあつたりと、うれしさと同時に子供に対してうらやましさも感じているこの頃です。10月は長女でしたが、12月には長男が誕生日ですので、そろそろパーティ会場予約などの準備に追われることになるでしょう。

このような充実した1年となったのも全てBCJA 奨学生となったことがきっかけでございます。誠にありがとうございました。現在は少しでも早い時期にPhDが取得できるよう日夜奮闘している状況であり、当分帰国は難しい状況ですが、近い将来に皆様にお会いできることを願っております。BCJAの益々のご繁栄を祈念しております。

(2003年度BCJA 奨学生、Cardiff University、経営学)

## 2003年度BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告[3]

### ロンドンの一年をふりかえって

藤崎 麻里

BCJA 奨学金の授与を知ったのは、渡英してから数週間経ったときでした。最初の数週間は、本当にきつく、すべてに見放されたような気持ちになり、英国に来るべきじゃなかったのではないだろうか...そんな想いもかすめはじめていました。郵便ストのせいで日本から送ってもらった諸書類の封書が一ヶ月以上も届かず、その結果、入学金の振込みの書類証書がなく、手続きに一層時間がかかり、寮の入居もうまくいかず、さらに地下鉄(Northern Line)は2週間も脱線のために代替で運行されているバスで1時間半以上もかけて通学する毎日...。大学院の授業が始まり、焦りながら生活基盤を築きつつ、郵便局、大学の事務局、アコモデーションオフィスを毎日往復し、体力的にも精神的にもヘトヘトでした。BCJA 奨学金をいただけるというご連絡の通知が、未開封のまま先の封書のなかに入っていたため、私の実家にお電話をいただいたことにより、初めて受賞がわかりました(あの時ご連絡が遅くなってしまってごめんなさい。そしてありがとうございました)。支えてくれている人たちがいる! - あの時、そう感じられたことがどれだけ励みになったことか。言葉では言い尽くせないほど、本当に感謝しています。

\*\*\*\*\*

私は London School of Economics の MSc International Relations というコースで学びました。このコースでは最初の二学期(秋・冬)間は必須科目である International Politics 以外に2つの科目をとることになっています。この2つの科目はLSEのどの学部の授業科目でも受講可能ですが、私は、Strategic Aspects of International Relations および Conflict and Peace という国際関係学部の授業を受講しました。一つの科目は、各々1時間の講義と1時間半のゼミからなります。ほかに学期中にも、英語を母語としない学生のために Language Centre ではアカデミックな英語の授業がいくつか行われており、利用させてもらいました。これらの授業は年間の授業料の内にあるということで特別に授業料を払うこともなく、且つ少人数制のために個人個人のニーズに行き届く授業だったため、大変役に立ちました。教育機関としての英国の大学の素晴らしさを感じました。英国に修士課程で留学された皆様はよくご存知だと思いますが、授業に追われる秋、冬学期の後にある春学期には、6月にある試験に向けて個人で勉強をすすめることになっており、夏には修士論文を仕上げる...という怒涛の一年でした

異なる文化がどのように平和的に共存していくことができるのか - これが、私が高校時代からずっと抱いていた問題関心です。LSE で国際関係を学んでいる人たちの多くは、欧米出身者が多く、70人強いる学生のうち、中東出身者は3人ほど、東アジア出身者は私を含めて3人、アフリカや南アメリカ出身者には出会いませんでした。そのため、たとえば現行にある平和構築について議論するときは、地域文化の重要性を説く開発学の学生などいますが、多くの学生が民主主義

の普及のみが解決であるという認識にたち議論をすすめていました。西洋文化が色濃くある環境のなかで、平和と文化について議論するうちに、非西洋地域と西洋の狭間にいる私の立場をより強く感じるようになりました。国際情勢や個人個人の関心から、こうしたトピックについて語り合う機会は、授業の最中だけでなく、授業後のカフェや、図書館付近での井戸端会議、勉強会メンバーとの勉強の中休み、とさまざまな場面でありました。議論やおしゃべりに加わり、自分なりの視点を広げ、深めていく中で、異なる文化がどのように平和的に共存していくことができるのか、というテーマを改めて、より現実的な文脈で捉えなおすようになりました。今も日本の大学院で、研究を続けていますが、留学中のこうした経験は私の人生にとって宝物であると思います。

LSE は、キャンパスのない大学であり、いわゆる大学らしさはあまりないともいえます。ですがロンドンの中心部にあることで、たとえば SOAS などの他大学の図書館をはじめ、IISS など研究所の図書館、及び British Library の Reading Room など、さまざまな図書館や施設を利用できました。また大学内外で、シンポジウムなど多岐にわたる企画が、毎日のようにたくさんありました。時間がもっとあったら色々講演を聞くことができるのに!と残念に思ったことは一度や二度ではありません。一年間という限られた時間のなかでの勉強であるために、ロンドンの街の魅力に触れられる機会は限られていましたが、週末には友人とハムステッド・ヒースを散策したり、美術館に行ったり、ロンドンならではの企画に出かけもしました。たとえばハムレットの舞台を現代中東におきかえてアラビア語でやる劇を、イラク人、パレスチナ人、トルコ人の友人の批評を聞きつつ観たり、ジンバブエ出身の男の子たちの故郷を想うギターの弾き語りを聴いたのは忘れられない思い出です。

寮は Goodenough College という Russell Square にある国際学生寮に入ることができました。大学院生専用のこの寮では、さまざまな背景をもつ学生たちと触れ合うことができました。院生ということなので、学部を卒業したばかりの人もいれば、子供連れの人もいて、ちょっとした団地のような感じでした。また専門も多岐にわたっていて、医学部の人もいれば、美大の人もいます。私にとっては日本での大学も大学院も社会科学系の専攻のみであったため、外国文化という意味ではない、異文化接触となりました。毎朝起きると、子供たちが幼稚園に行くために廊下を走っていき、窓からはソプラノ歌手を目指す女の子の発声練習が聞こえる...。夜のキッチンでは、インド、中国、マレーシア、イタリア、フランス...各地の食材の香りが入り乱れ、出来あがった料理を食べさせてもらったり、おすそ分けしたりするなかで、「そろそろ実験結果見に行かなくちゃ...」と研究室に戻っていく理系の学生がいる。不思議にも聞こえますが、「当たり前」という既成概念がない、居心地のよい日常の空間でした。

一つの大学をつくるようなコンセプトをもとに、コミュニティとして多文化をわかちあうことが目的とされているこの寮でも、毎日のようにイベントがありました。アカデミックなシンポジウムをはじめ、学生の映像発表や演劇、音楽会も

あれば、スポーツをする部活、ダンスサークルやオーケストラもあります。それぞれの専門を活かしているの、音楽会なども本格的でした。修士課程での一年しかない私は、何か一つの活動にコミットすることはできませんでしたが、毎週のアフタヌーンティと称した寮のイベントでは、日本人の学生と和菓子をつくってふるまったり、中国の新年祭を手伝ったりもしました。和菓子はおはぎでした。もしかしたら珍しすぎる和菓子は敬遠されるかもしれないと危惧しましたが、日本食ブームも手伝って、かなり好評でした。イタリア人の学生は、お代わりをしながら、おはぎから派生して日本文化についても熱心に話を聴いてくれました。ティップする用にと黄な粉も用意したのですが、インド人の女性が、インドにも似た食べ物があるわ！と教えてくれたりもしました。またシンガポール人の学生は、おはぎにココナッツパウダーをかけるアイデアも思いついて、今では自分でも作っていらっしゃるそうです。「まさに文化のフュージョンだね」そう日本人の学生が笑った顔が今でもとてもリアルに思い出されます。文化とはほかの文化と出会い、変容していくものだと思います。こうした日々の営みの積み重ねのなかで、異なるものとの出会い、理解し、共通項を見つけ、また受け入れて、よりゆたかになっていく...そのプロセスがいかに重要なものであるかを、机上の空論ではなく肌で感じました。これは私の問題関心を追求していく上でも、大きな鍵となると思います。

こうして文章を書く、色々な思い出が交錯し、思わず胸が熱くなるような、かけがえのない一年でした。改めてBCJAのご先輩の皆様の留学に際してのご厚意に、心からお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

(2003年度BCJA奨学生、LSE、国際関係学)

## 2003年度BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告[4]

「活力溢れるロンドンでの1年間の留学生生活を終えて」

石井 加代子

2003年8月末、一年間の留学生活への大きな期待と緊張を胸に、私はロンドンに向けて東京を後にしました。あれからすでに1年以上の月日が経ち、今、再び、私は東京の地に戻ってきております。時々ロンドンでの素晴らしく充実した1年間を思い起こしながら、それに負けないくらい充実した生活を描き続けようと日々努力しております。

BCJAの方々には、London School of Economics 留学に際しましてご厚意を賜り、心から御礼申し上げます。皆様の暖かいご支援のもと、大変充実した留学生活を送ることができました。つきましては、以下に私の留学生活につきまして、ご報告させて頂きたいと思っております。

\*\*\*\*\*

私は、London School of Economics and Political Science (LSE) という大学で、Social Research Method (Social Policy) の修士号をとるため、1年間ロンドンで留学生活を送りました。留学先であるLSEはロンドンに中心街に位置し、キャンパスを持たないため、周りの商業ビルに溶け込んだ形

で存在しています。この大学は、ロンドン大学のカレッジのひとつに属し、創設者でイギリスの貧困調査の古典的存在と言われるウェッブ夫妻、ブレア政権のブレインとして活躍した社会学者のアンソニー・ギデンス、国際投資家のジョージ・ソロス、はたまたロック・ミュージシャンのミック・ジャガーなど、世界的な著名人を多く輩出している大学であります。さらに、私が専攻している社会政策 (Social Policy) の研究が世界的に非常に高水準なものであり、こういった理由から、留学を実行する3年前、ちょうど私が慶應義塾大学の修士課程で本格的に研究を始めた頃より、LSE で学ぶことは私の近い人生の大きな目標でした。

留学が決まるまでは、LSE で勉強することは夢のまた夢であったので、実際留学が決まった時は、この素晴らしい機会を無駄にしてはならないと思い、自分の頭と心とそして少しの運を頼りに、充実した留学生活を送ろうというのが私のモットーでありました。

私の期待通り、LSE、そして魅力的な都市ロンドンに、私に一年間の素晴らしい経験を与えてくれました。まずは、色々な考えを持つ人々と出会い、とてもいい刺激を受けたということです。留学先LSEの修士課程には、世界のあらゆる国から優秀な学生が学びに来ていて、彼らの学問への姿勢や、研究への取り組み方が、良し悪しは別として、私にとっては見たことも触れたこともないような新鮮なものでした。例えば、幾人かの非常に優秀な学生は、理論を学ぶとすぐに色々な現実の出来事に応用するなど、学問をとて柔軟な生き物のように扱っているように見ることができました。これは、研究に対する私の姿勢に、非常にプラスになる刺激を与えてくれました。また、全く社会環境の異なる国から来ている学生達は、ものの見方もそれなりに異なり、これは研究対象としての日本社会の特質を気付かせてくれるいい機会として働きました。イギリスの大学には大学内にパブがあり、金曜日の午後などになると、授業を終えた多くの学生や教師で賑わい、こういった場でも、色々な人の多様な関心事や、面白い情報や意見について、気軽に話をすることができました。LSEで素晴らしい学生たちに出会えたのは、留学で得た貴重な経験の1つであります。

そして、そういった素晴らしい学生達の幾人かと本当によい友情を築くことができたのは、私の一生の宝物だと思います。知っている人もいない大都会で、一年間生活をするということは、非常に魅力的なことではありますが、少々難しい面もあると思います。なにか問題があったとき、頼ることのできるのは、つい何ヶ月か前に知り合った人のみという環境の中で、私は運良く、フラットメイトやクラスメイトの幾人かと本当に素晴らしい友情を築くことができました。

また、先ほども述べたように、社会政策の分野に関してはLSEにおける研究は非常にレベルの高いものであり、日本で勉強をしている頃より、LSEから出版される論文や書物を好んでよく読んでおりました。留学ができたことで、そうやって日本で読んでいた書物や論文の執筆者の講義を聞いたり、直接指導して頂けたりすることは、私にとってこの上なく嬉しいことでありました。実際、運良く、私の論文指導の教授は、私が日本にいる頃より注目していた所得分析の本や論文

の著者であり、そのような教授に非常に手厚く論文の指導を受けられたことは、私の人生に非常にプラスに働く出来事でありました。日本の大学院で勉強していた頃から、私は高齢者介護政策の研究をしていて、留学先の論文でもイギリスのデータを用い、介護に関する研究を致しました。指導教授を含め、関連する教官に論文の指導をして頂いたことで、社会政策における新しい理論を深められたり、色々な視点から研究対象を眺められるようになったりと、とてもいい刺激を受けることができました。

さらに、1年間生活を続けた大都市ロンドンは、国際色豊かで、非常に刺激的な都市でありました。ヨーロッパ域内やインドを始めとし、世界各国から多様な人々が成功を目指してやってきました。EUのパスポートを持っていない私でも、留学というかたちで、こういった外国の都市の活気のよさを実感することができ、とても嬉しく思います。毎朝、バスでテムズ河を通り大学へ向かう途中、そういったロンドンの人々の活気を肌で感じることができました。

魅力的な都市ロンドンでの私の一年間の留學生活は、実に素晴らしいものでありました。この貴重な経験をこれからの人生に十分活かしていけるよう努力していきたいと思ひます。最後になりましたが、再度、BCJAの皆様の暖かいご支援に深く感謝申し上げます。

(2003年度BCJA奨学生、LSE、社会政策)

## 2003年度BCJA 英国留學奨学金授与者からの近況報告[5]

英国での研究内容と留學の成果、そして留學後の活動

小原 ひろみ

### 英国での研究内容と留學の成果

留學しておりました、ロンドン大学公衆衛生熱帯医学大学院は、公衆衛生大学院としては、ヨーロッパ随一といわれているだけあり、歴史もあり、また、講師陣の層の厚さ、講義の質の高さに、驚くばかりでした。1年間という短期間ながら、たいへん濃密なコースでした。世界各地からの留學生と共に学び、議論し、多様な文化とキャリアを持つ人々と共に学び働く経験となりました。

私は、疫学修士課程で学びました。疫学というのは、個人ではなく集団を対象にして、疾病の分布を調べたり、リスクファクターを探したり、病気の原因を探したり、またどういった介入(治療法、保健サービス、保健教育等)が効果的なのか等を調べたりする学問です。

この修士課程の内容をご紹介しますと、2004年9月から12月までは、疫学と統計の基礎、リサーチの基礎をみっちり仕込まれました。2005年1月から5月までは、多様な応用コースを選択できました。疫学と統計の応用コース、感染症コントロール、リサーチプロポーザルの書き方、途上国での疾病コントロールプログラムの作り方、HIV/AIDSといったコースを選択しました。6月には、試験があり、6月下旬から9月上旬までで、英語1万字的の修士論文を仕上げました。

論文は、「カンボジア国立母子センターにおける妊産婦死亡、妊産婦重症疾患の有病率と規定因子」について検討をしました。既存の病院データベースを主に利用しましたが、一部、データを採取しなおすために、大学院の休暇を利用して2004年1月と7月には、現地カンボジアを訪問しました。妊産婦死亡・重症疾患が、どの程度おこっているのか、そのなかでもどういう疾患が多いのか、死亡に至りやすい産科疾患は何なのか、を明らかにしました。さらに、居住地の距離が遠いこと、首都ではない地域に住んでいること、高年齢であることも、死亡に至りやすい要因であることが明らかとなりました。



ロンドン大学公衆衛生熱帯医学大学院  
(ちょうど、大英博物館の裏にあたる)



実習中の写真「某国でコレラが大発生した」という仮想実習  
(英国、韓国、アメリカ、ケニアのメンバーと対応策を考える)

今回の留學で学びたいと期待したことは、「疫学の考え方というツールを得ること」です。

上記のように、1年間の留學中に、疫学研究を行う基礎・応用を講義と演習で学び、さらに修士論文を作成することにより1度自分でそれを消化し実践してみることができました。期待した「疫学の考え方」というツールを獲得でき、今後、疫学論文を書いていく自信を得ることが出来たということが、留學の成果です。しかしながら、それが出来るために、留學前には考えなかったことが必要であることに気が付いたことが、実は、真の成果であると考えます。

「留学前に考えなかったこと」というのは----

1. 「物事を批判的に見る視点」。徹底して、物事を批判的に見、まずは、疑ってみる、他人が書いた論文は、客観的に吟味する。そして自分が作成した論文の中でも、自分の行った手法等を批判的にみて、なにが弱点なのかを明らかにすること、どうやってその弱点を減らすかを考えること、または、論理的に正当化する理由を考えることが必要であること。

2. 「個人ではなく集団にメリットがあるよう保健を考える視点」。日本は、世界の中では例外的にお金持ちの国で、個人にベストの保健サービスを提供すれば、多くの場合、集団にもメリットがある例外的な環境にあります。つまり、お金持ちの国であるため、ベストの医療を多くの人に提供できる環境です。したがって、なかなか、この個人と集団とのメリットの違いに気が付きにくい環境にあります。世界の多くの国では、非常に限られた保健予算のなかで保健サービスを提供しており、高価なベストの保健サービスを提供してしまうと、ごく限られた一部の人にしかサービスが提供できずしたがって集団のレベルでみると効果が得られない、などということが起こります。また、個人レベルで効果ははっきりしている何らかの治療法・保健サービスも、集団でみると実際上、効果が得られにくい場合などもあります。ですから、個人レベルで効果があると考えられている保健サービスでも、集団を対象にして本当に効果があるのかどうか、疫学研究で示していく必要があるわけです。

### 留学後の状況

現在は、カンボジア JICA カンボジア母子保健プロジェクトに派遣され働いています。カンボジア保健省 国立母子センターという3次病院で、産婦人科医を指導しています。留学の前の2年間も同病院、同プロジェクトで働いておりましたが、前回の仕事は、主に、研修機能の強化と、病院診療機能の強化でした。今回は、研究の指導を依頼されており、ロンドンで学びました研究手法を生かして、今度は、指導しております。

今回修士論文でわかりました内容は、現地保健省と国立母子センターにフィードバックし、現地の母子保健サービスの向上に役立てて頂く予定であります。今回の研究から、どういった産科重症疾患が多く、どういった産科疾患が死に至りやすいかわかったわけですから、それは、今後、疾患管理ガイドラインを作成したり、母子保健行政を考えたりする上で、優先順位をつけるために、有用な基礎となります。

また、修士論文内容は、今後、若干改変して、英文の医学雑誌もしくは公衆衛生雑誌への投稿を予定しております。実は、途上国の妊産婦死亡や妊産婦重症疾患を扱った論文数は、これまで多くはなく、投稿により、カンボジアだけではなく、他国の妊産婦保健を考える上でも役立ちますし、重症妊産婦疾患という研究の向上にも役立つと考えます。

今後とも、途上国の母子保健への支援に関わっていきたいと思っております。その中で、自分の産婦人科医、国際医療援助のスキル、そして、今回ロンドンで学んだ、疫学研究のスキルを生かしていく予定です。具体的には、途上国の妊産婦死亡を低下させるために、医療サービスと母子保健政策を

どうしていったらよいか、リサーチを通して根拠を集積していきたいと考えています。

### おわりに

BCJA 奨学金は研究費として使わせていただきました。たいへんありがとうございました。無事、留学を終了し、また修士論文を完成させることが出来、安堵しております。感謝申し上げます。

(2003 年度 BCJA 奨学生、London Sch of Hygiene and Tropical Medicine、疫学・公衆衛生学)

### 2003 年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告[6]

高温超伝導 3 次元解析を目指して

- Brighton の研究室より -

鹿島 洋平

私は2003年10月より英国南部の海辺の町 Brighton にある University of Sussex、Dphil programme in mathematics に在籍し、Doctor of philosophy 取得を目標に応用数学の研究を続けております。3年間の博士課程のうち早いもので1年が既に過ぎました。丘の上の日当たりの良い研究室で日々精進と試行錯誤の研究生生活を送っております。

私が博士論文のテーマとして現在取り組んでいる問題は、高温超伝導の3次元空間における電磁場解析です。これはすなわち、電気抵抗ゼロの電流が流れる高温超伝導体（液体窒素の沸点以上で起こる超伝導体）を我々の生活する自然な3次元空間に置き、外部から電磁場を与えたときに超伝導体の内部に流れる電流とその周辺の電磁場のふるまいを解析するという研究です。高温超伝導体の塊を空間に置くという状況の応用上の必要性にもかかわらず、その数値計算は計算量の膨大さなどの困難からいまだ制約が大きく、研究論文の少ない開発途中の技術となっています。博士論文として応用解析・数値解析の手法によりその計算方法を構築し、電磁場の可視化をまとめることを目標にしています。

私が英国の大学院に留学することとなったきっかけは、日本の大学・大学院にて数学を学び、研究するにつれ、数学の理論を科学・工学に実際に現れる問題に応用したいと考えるようになったことです。特にその開発と応用を目指して活発な研究がなされている超伝導という分野に応用数学的な手法を用いて関わりたいという希望を持ちました。しかしながら高温超伝導の応用解析・数値解析は日本の数学科で研究されている分野ではありません。そこで私の修士課程の研究テーマ（材料科学に現れる結晶成長のモデル方程式）に精通した応用数学者であり、また、超伝導の数値解析の研究グループを構成している University of Sussex の Charlie Elliott 教授の研究室に移籍することになりました。現象を記述する偏微分方程式の理論的な研究が盛んな日本と比べ、イギリスでは理論の応用について数学者・物理学者・材料科学者などの研究交流が頻繁に行われていることが数学のより現実的な応用に興味を持ってやってきた私にとって喜ばしい驚きでし

た。この分野の違いを許容する研究環境でかねてから望んでいた超伝導の解析への挑戦が始まりました。

University of Sussex は、週末や夏期にはたくさんの人で賑わうイギリス海峡の浜辺から北に向かってバスで 20 分ほどの所にある、のどかな緑の丘に囲まれた大学です。大学の東側の丘の上にある数学科の私の研究室の窓からは斜面をリスとウサギが駆け回り、海から飛んでくるカモメが芝生の上で足踏みをしては土から頭を出す虫を啄ばんでいるのが見えます。研究は計算量の最適化と安定・収束性を保証するために無数の組み合わせをひとつひとつ検証する辛抱の連続ですが、書き下したアルゴリズムを前に考えがまとまらなくなると研究室の裏から丘の上に登ります。そこからはキャンパスが一望に見渡せ、大学の建物を越えた西側に向かい合う遠い丘の斜面には放牧されている牛たちが黒い点になって見えます。緩やかな丘陵の切れ間から海の方角よりやってくる風に吹かれて雲が流れていくのを眺めていると、沸騰したような頭も冷やされ不思議とアイデアも整理されていくのは苦しい研究生活の中での楽しいひとときです。コミュニケーションによって研究上の刺激を受けることがあっても、日々の2歩前進1歩後退的な科学研究の地道な進展は自らの足を前へと動かすより他に求める方法はありません。このような落ち着いた環境で自分自身へ挑戦できることがこの留学の大きな喜びです。

私の Dphil programme も 2 年目に入り、1 年目に考案したモデルの定式化と離散化の設計を実際に計算機に打ち込む仕事になりました。週に 4 時間学部生の数学演習の監督をティーチングアシスタントとして受け持つほかは研究室でプログラムを組んで削り磨く作業を続けています。超伝導体を取り巻く電磁場を記述する方程式は巨視的 (macroscopic) モデルと呼ばれ、基礎方程式としてマクスウェル方程式系が採用されます。しかしながら常伝導とは異なり超伝導体内においては線形のオームの法則は成り立たないため、超伝導現象特有の非線形性の強い電場と磁場の関係系をオームの法則の拡張として用い、マクスウェル方程式系と連立させたものが磁場侵入を許す第 2 種高温超伝導の巨視的モデルとなります。強い非線形性のためその定式化は「等式」ではなくある種の「不等式 (発展変分不等式)」としてなされ、それを離散化したものは非線形関数の最小化問題に形を変えます。その最小化問題の最適解を求めることで表現したい電磁場の近似解を構成します。モデル方程式で記述される電磁場は無限の自由度を持つ対象であり、数値計算による近似とはその理想的な無限次元のもの有限次元の離散解による近似とすることが出来ます。したがって離散解の自由度を増やすにつれて目的の無限の対象に近づくことが保証される近似法が安定性のある計算と考えられます。そのような収束性を考慮しつつプログラムを組み、最近ようやくシンプルな設定における超伝導体内に誘導された電流を出力することができました。今後は離散化の自由度を増やし計算できる物理的設定を一般化することが目標となります。

BCJA の皆様には留学奨学金を頂きましたことを心よりお礼申し上げます。私の日々の歩みは小さなものですが、これを積み重ねることによって、BCJA 奨学生として、いつの日か

人が未来に希望を感じるような新鮮な風を科学技術の世界に送り込むことができるよう精一杯の努力を続けるつもりであります。

(2003 年度 BCJA 奨学生、University of Sussex、応用数学)

## 2003 年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告[7]

### 「英国留学レポート」

松原 慈

2003 年 9 月より、英国ロンドン The Bartlett School of Architecture (University College London) にて勉強していました。私が在籍していたのは、Master of Architecture (Architectural Design) という 12 ヶ月の postgraduate プログラムです。ロンドンに到着した当日のことは、よく憶えています。初めの 6 ヶ月間は Camden 地区にある学校の寮に住んでいたのですが、まず夕方寮に到着すると、ベッドとマットレス以外の寝具がありません。9 月も半ばを過ぎれば夜は涼しいのですが、その日は仕方なく、愛用している大きなマフラーを体に巻いて寝、翌日、掛け布団を探すことにしました。2003 年の 4 月に 1 週間ほど学校や街の様子を知りたくて、初めてロンドンを訪れていたの、街について、少々予備知識はありました。「掛け布団」を探すのであれば、と、ちょうど週末だったので、東ロンドンの Petticoat Lane Market を訪れてみることにしました。ところが、布団屋さんを見つけたのはいいものの、「What are you looking for?」とおじさんに訊かれ、ハッと「掛け布団」という英単語を知らない事実気づき、早速困ってしまいました。戸惑ってしまい、仕方なく、「昨日ロンドンに着いたばかりで、ベッドはあるんだけど、自分を温めるものがない。」と説明しました。本当は掛け布団は「DUVET」と言います。あとで友達に「僕が温めようか」と言われなくてよかったね」と笑われました。日常生活に関する英語はなかなか奥が深いものです。

寮での生活は、まったく異なる分野の勉強をしている学生の人たちと出会える唯一の機会、新鮮な感じがしました。興味範囲や、共通の話題が一方に偏らないので、最初は話づらいですが、幾度も顔を合わせているうちにお互いに慣れて、よい刺激になります。6 ヶ月住んだあとは、寮を離れて、Bethnal Green 地区で学校とはまったく関係のない 4 人の友達とハウスシェアリングをしています。彼らの専門は、それぞれ、建築、フィルム、手話、アートなどです。これもまたとても楽しい経験で、ロンドンという場所性を活かして、国籍、学校や専門に偏らない、いろいろな人と親しくなる機会はあちこちに転がっています。

ロンドンは、世界中の若いデザイナーが集まって勉強する場所です。これにはすぐに気がつきました。街を歩けば同じような境遇のデザイナーにすぐに出会うのです。同じようなことをしている人は同じような行動範囲を持っているので、わりとすぐに友達になります。Bartlett を含めたデザイン学校のパーティや、デザインイベントやエキシビションのパーティ、ハウスパーティなどの各種パーティで出会う人、友達

の友達、カフェバーで何回も顔を合わせる人、などなど。オープンな気持ちで街を歩いていると、すぐにみんな顔見知りばかりになります。ロンドンは確かにエリアも広くて、東京のように大きな街ですが、人の住み分けがはっきりしていて、デザインをやっている私としてはロンドンでの行動範囲は完全に東側で、銀行員や法律家、といった異なる職業柄の人々と出会うのはなかなか難しい一方、似た環境の人とは出会いやすい街の作りになっているようです。週末に、東ロンドンを歩いていけば、50mに一回は知り合いに出くわす、といった具合です。さすがにロンドンは、外国人が多い街です。ロンドンに慣れると、東京がモノトーンに見えます。かつてNYを「人種のるつぼ」と言いましたが、今のロンドンはまさにNYにも増して「るつぼ」と化しているのではないのでしょうか。ロンドン生まれロンドン育ち、生粋のロンドンっ子に出会うことはなかなかありません。部外者がイメージを作り上げているのが今のロンドンです。それがロンドンの非常に面白いところです。

さて、学校のデザイン教育について少しお話しします。ひと言で言うと、イギリスのデザイン教育は、とてもものびのびとしていました。もちろん叩き込む部分もあるのですが、先生と学生の境界があいまいで、学生のやろうとしていることに教育者は熱心に耳を傾けます。と書くと、わりと普通のことには聞こえますが、たとえば日本の建築教育では、ル・コルビュジエやミースファンデルローエといったモダニズムの確立者たちに倣うのがまずデザインへの取っ掛かりであることが多いのに対して、こちらでは、昔の建築家、デザイナーを崇めることよりも、もっと若くて新鮮なデザインを貪欲に求めることを要求されます。教師も、学生がやろうとすることを、どこまでもっと新しく、オリジナルなものにできるか、というところに注力します。これは大きな違いです。また、一年の終わりにある、学生作品の展覧会 Degree Show は、大きなイベントで、作ったものを人に見せるところまで学生に責任をもって学ばせます。これも、日本の学校の展覧会のレベルに比べると、どこの学校も、こぞって格段に宣伝もすれば、集客力もある、大きな展覧会に仕上がります。少々派手でお金のおいがる気もしますが、デザインやアート教育において、プレゼンテーション能力を高めることは非常に重要なポイントです。日本と英国では、「見せる」ことへの意識が非常に違うように感じ、貴重な経験になりました。

私が通っていた The Bartlett School of Architecture の M.Arch コースは、建築界の名教育者として知られている Peter Cook が長年受け持ってきたコースです。Peter Cook は、実際の建築物をデザインするよりも先に、1960年代後半から70年代にかけて、ARCHIGRAM という若い建築家の実験的活動グループのメンバーとして活躍し、グループ解散後は、思想家/教育者として数々の建築家を育ててきました。2003年度のM.Archコースには、世界およそ20カ国から、国籍、年齢さまざまな50人近い学生がPeter Cookのもとで勉強するために集まりました。建築に対する考え方、バックグラウンド、興味範囲も各人色濃く様々で、ごく初期はそうした相違が緊張感を生む場面もありましたが、あっという間に互いの違いに慣れ、同志として親しい仲になるようになりました。

ひとたびそれだけの異なる人間の密な集まりを経験すると、同国籍、同人種だけの集まりは、非常に平坦で淡白なものに見えるようになりました。これは学業に加えて、非常に素晴らしい経験だったと思います。またちょうど2003年10月、オーストリアのグラーツに、規模の大きな建築としては、Peter Cook 初の実作となる現代美術館が竣工しました。これに伴い、美術館のオープニングに合わせてクラスのフィールドトリップでグラーツを訪れる機会も得ました。残念ながら、私たちのクラスを最後にPeter CookはBartlettから引退することになってしまいました。30年以上に渡って建築学生に及ぼした影響は計り知れませんが、ユニークな独自の教育方法を生み出したPeter Cookのもとで勉強ができた幸運に感謝しています。

1年間を通して、英国で得た経験の数々は計り知れませんが、ロンドンで生活する前の自分とロンドンでの毎日を経験したあとの自分を比べると、物事の見方がとても寛容になっていることに気がつきます。一つ場所に安定しているときは、それを当然のことと思い、それはそれで満足な生活を送ることができそうですが、一度その安住の地を離れると、やはりどうしても新しいことがいくらかでも待っていて、想像している以上に知的好奇心を刺激されます。東京で勉強していたときにも、たくさんの新しい知に触れることはできましたが、ロンドンへ足を伸ばし、数えきれない新しい人と新しい環境の中で会話をし、学び、温めたものは、再び私が訪れる故郷の東京にさらに新鮮な種を植え、生き生きとした豊かな都市を育む糧となると信じています。最後になりましたが、そうした実り豊かな若い日々をご経験になり、より若い世代へその貴重な経験を伝承しようとご支援くださったBCJAの皆様には、深い感謝の意をもって、心よりお礼申し上げます。

(2003年度BCJA奨学生、Univ College, London, 建築学)

## BCJA 会計報告

### 2004年度決算報告書

2003年10月1日～2004年9月30日

(一般の部)

収入の部

科 目	金 額
前年度繰越金	2,224,530
会 費	184,000
雑 収 入	12
借 入	6,901
合 計	2,415,443

支出の部

科 目	金 額
BC 郵送代	87,440
振込手数料	525
図書・通信費	760
現金支払	116,901
合 計	205,626

(BCJA 奨学基金の部)

収入の部

科 目	金 額
前年度繰越金	2,043,254
雑 収 入	6
合 計	2,043,260

支出の部

科 目	金 額
奨 学 金	1,500,000
振込手数料	4,620
合 計	1,504,620

2004年10月25日現在の資産状況

現金	6,901	収支剰余金	1,636,096
預金(BCJA)	1,609,817		
預金(BCJA 奨学金)	33,180		

**BCJA の銀行口座変更のお知らせ**

金融機関名: UFJ 銀行

支店名: 飯田橋支店(664) (03)3268 - 4131

科目: 普通

口座番号: 3654677

受取人名: BCJA 島津幸男

**要注意!**

総会参加費等、BCJA への振込時、ネットバンキングをご利用の会員の皆様には、次の点をご注意下さい。

**振込先: ピーシージェイエー(BCJA)**

これまでの振込時にご迷惑をお掛けした会員の方には、お詫び申し上げます。また、この件をご案内下さった会員のご好意に感謝申し上げます。

(島津幸男、株式会社エムブイエヌオー、LSE 1973-74, Industrial Relations Research Fee Student Post Graduated, [ys-mex@ninus.ocn.ne.jp](mailto:ys-mex@ninus.ocn.ne.jp))

BCJA ホームページについて

ホームページ担当

BCJA のホームページ <http://www.bcja.net/> では、過去のニューズレター閲覧、BCJA 英国留学奨学金、BCJA 活動状況、メンバー向け案内、掲示板などがご覧になれます。より良いサイトにするため、どうぞ皆さまからのご意見、ご希望をお寄せ下さい。(メールアドレス [m-aoyagi@aist.go.jp](mailto:m-aoyagi@aist.go.jp) まで)

[編集後記]

本ニューズレター21号では、BCJA 英国留学奨学金2004年度報告、2003年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告7件、会計報告などを掲載することができました。原稿をお寄せいただいた方々に大変感謝いたします。また、編集作業について、池島先生(同志社女子大学)にご助力をいただきました。お忙しいところ大変ありがとうございます。

最後に、本レターをますます充実させたいと思っているところですが、そのためには、皆さまからの積極的な寄稿が不可欠です。今後ともご協力をよろしくお願いいたします。なお、本レター発送については、会計担当の島津様にご協力いただきました。この場を借りて、心より感謝いたします。

(青柳昌宏、独立行政法人 産業技術総合研究所、National Physical Laboratory 1994-95, [m-aoyagi@aist.go.jp](mailto:m-aoyagi@aist.go.jp))

